

CARCINOSTATIC

Patent Number: JP57156418
Publication date: 1982-09-27
Inventor(s): YOSHIDA NOBORU; others: 02
Applicant(s): SUMITOMO KAGAKU KOGYO KK
Requested Patent: ☐ JP57156418
Application Number: JP19810041109 19810319
Priority Number(s):
IPC Classification: A61K31/70
EC Classification:
Equivalents:

Abstract

PURPOSE: A carcinostatic having low side effects such as bone marrow suppression, etc., exhibiting a carcinostatic action in a wide range, easily water-soluble, capable of being processed into various kinds of drug forms, having low toxicity, comprising bredinin, a nucleotide antibiotic, as a main ingredient.

CONSTITUTION: A carcinostatic comprising 4-carbamoyl-1-beta-D-ribofuranosyl imidazolium-5-oleate shown by the formula or its salt as main ingredient. The compound shown by the formula exhibits a carcinostatic action not only on a heterotypic tumor such as Ehrlich carcinoma but also on a homotypic tumor such as mouse leukemia p 388, Lewis lung cancer, etc. which has been regarded as a slightly curable disease, by inventing a medication method such as oral medication or frequent continuous medication. High safety is observed by acute toxic test, the carcinostatic can stand a long-term use since it has very low bone marrow suppression which is found in a carcinostatic in wide use. In medication, a proper period of the stop of administration is provided, and continuous medication is carried out, to reduce the disorder degree of a host and to exhibit an extremely carcinostatic effect.

Data supplied from the esp@cenet database - I2

⑨ 日本国特許庁 (JP)
 ⑫ 公開特許公報 (A)

⑩ 特許出願公開

昭57-156418

⑤ Int. Cl.³
 A 61 K 31/70
 // C 07 H 19/04

識別記号
 ADU

庁内整理番号
 6675-4C
 7252-4C

⑬ 公開 昭和57年(1982) 9月27日

発明の数 1
 審査請求 未請求

(全 5 頁)

⑭ 制癌剤

① 特 願 昭56-41109

② 出 願 昭56(1981) 3月19日

⑦ 発 明 者 吉田登
 大阪市東淀川区東淡路 1丁目 5
 番 3-618号

⑦ 発 明 者 中村誠

宝塚市売布 2丁目 14番 7号

⑦ 発 明 者 荻野重男

西宮市飯岩町 5-30-202

⑦ 出 願 人 住友化学工業株式会社
 大阪市東区北浜 5丁目 15番地

⑦ 代 理 人 弁理士 木村勝哉

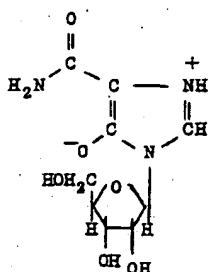
明 細 書

1. 発明の名称

制癌剤

2. 特許請求の範囲

下記式で示されるターカルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトまたはその塩を主成分とする制癌剤。



3. 発明の詳細な説明

この発明は、ターカルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトまたはその塩を主成分とする制癌剤に関する。

本発明化合物は、ヌクレオチド抗生物質ブ

レティニンとして公知のものであり、例えばジャーナル・オブ・アンチバイオティクス (J. Antibiotics) 27巻、775ページ (1974年) 記載の方法によって醗酵生産され、また薬学雑誌 (Chem. Pharm. Bull.) 23巻、245ページ (1975年) 記載の方法によって化学合成もされ得る。

ターカルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトは、抗生物質としての活性は限定的であり、むしろ免疫抑制作用物質として機能することが見い出されてきており、その他の生物活性としてL-578Y細胞毒性が知られているにすぎず、それが有意な制癌作用を有することは全く知られていなかったが、当該発明者らは各種実験腫瘍、例えばエーリッヒ癌、マウス白血病P388、ルイス肺癌、マウス結腸癌コロノ26などを用いて該化合物の制癌活性を詳細に検討し、投与方法の工夫により、該化合物に著しい制癌作用があり、さらには骨髓抑制作用等を検討し、多くの汎用制癌剤に見られる骨髓抑制という副作用が該化

表-1 腹水型マウスエールリッヒ癌に対する延命効果

1) 延命率 (T/C%) ²⁾	投与方法	投与スケジュール ³⁾	1) 延命率 (T/C%) ²⁾
1) 延命率 (T/C%) ²⁾	投与方法	投与スケジュール ³⁾	1) 延命率 (T/C%) ²⁾
99	腹腔内投与	Day / のみ / 回	99
91	"	"	91
98	"	"	98
99	"	Day / より / 日 / 回、9日間	99
103	"	"	103
99	"	"	99
>185	"	Day / のみに 3時間毎8回	>185
129	"	"	129
139	"	"	139
毒性により全死	経口投与	Day / より / 日 / 回、9日間	毒性により全死
54	"	"	54
179	"	"	179
147	"	"	147
126	"	"	126

注 1) Day 0³⁾にマウス/匹当り 10^6 個のエールリッヒ癌細胞を腹腔内に移植し、24時間後 (Day /)より治療を開始

2) (薬剤投与群平均生存日数/対照群平均生存日数) × 100 %

3) Day 0は腫瘍移植日、Day /は腫瘍移植翌日を示す。

化合物が臨床的にきわめて有用な制癌剤であることを初めて見出した。

なお、本化合物は水に易溶であり、各種剤型変換の可能性を有しており、毒性も弱く、腹腔内投与のみならず静脈内投与、経口投与によって各種実験腫瘍に対し、広い用量域で制癌作用のあることが当該発明者らによって証明され、制癌剤として優れた特性を有するものである。

以下、本化合物の制癌作用、毒性等を示す。

(1) 制癌作用

本化合物の各種実験腫瘍に対する制癌作用を応用薬理4巻(1970年)、52/ページおよびキャンサー・トリートメント・レポート(Cancer Treatment Report)3巻パート3(1972年)、1/ページに記載された方法に準拠して調べた。

結果を表-1、2に示す。

(3)

表-2 マウス白血病P388に対する制癌効果

投与量 (mg/kg/day)	投与方法	投与スケジュール	延命率(T/C%)
100	経口投与	Day / より / 日 / 回、9日間	> 130
50	"	"	125

表-1からわかるように該化合物は腹腔内/回投与あるいは腹腔内9日間連続投与では全く制癌効果を示さないが、Day / のみに3時間毎8回の極端な腹腔内頻回投与を行うだけで、あるいは9日間の連続経口投与を行うことにより、著しい延命効果をもたらすことが見い出された。また、表-2からわかるように経口投与により同系腫瘍であるマウス白血病P388に対し有意な延命効果が見られた。

このような経口投与あるいは頻回投与による制癌活性の増強は、エールリッヒ癌、マウス白血病P388のみならず、サルコーマ180、皮下型ルイス肺癌、マウス結腸癌コロソ26、などにおいても認められ、該化合物の制癌活性が投与経路および投与スケジュールに著し

(4)

く依存していることが判明した訳であり、これらの知見をもとに該発明者らは本発明を完成した。

すなわち従来単なる連日腹腔内投与では、制癌効果が発現し得なかった4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトを経口投与とするか、あるいは頻回持続投与とするかにより各種実験腫瘍に対し有意な制癌活性を発現せしめることに成功したのである。

さらに各種実験腫瘍の試験管内細胞増殖におよぼす該化合物の増殖抑制効果を調べたところ、表-3のとおりであり、該化合物がきわめて低濃度で腫瘍細胞に対し直接的に作用することを証明した。

表-3 各種実験腫瘍に対する細胞増殖阻害効果

腫瘍細胞	IC ₅₀ (mM) ¹⁾
エールリッヒ癌	3.5×10^{-4}
マウス白血病P388	2×10^{-3}
サルコーマ180	1.5×10^{-3}

注 1) 5% CO₂、37℃、48時間培養後の50%増殖阻止濃度を示す。

(2) 急性毒性

使用動物：マウス ICR-JCL 系、雄、

体重 22~25g (n=6)

但し、動物は薬剤投与後 7 日間観察した。

結果を表-4 に示す。

表-4 マウスに対する急性毒性

投与経路	LD ₅₀ 値
経口投与	> 5000 mg/kg
腹腔内注射	> 5000 mg/kg
静脈内注射	> 1500 mg/kg

(3) 骨髄抑制作用

健康な ICR-JCL 系マウス（雄、体重 22~25g）に対し、該化合物を 500 mg/kg となるよう経口および腹腔内注射により投与し、経口的にマウス（ノ群 3 匹）を屠殺し、大腿骨中の有核細胞数を計測したが、投与直後に一過性の僅かな細胞数の抑制が見られたのみであり、数日後には無処置マウスとほぼ同数の骨髄細胞が認められるまでに完全に復帰し、該化合物による骨髄細胞への影響はほとんど

(7)

適当な休薬期間を設け、持続投与を続けることにより、連日一定量投与を継続する場合よりも宿主に対する障害度が低く、かつ著しい制癌効果を各種腫瘍に対して示す特性が見い出された。

また、本剤は従来化学治療が困難とされた固型癌に対し、上記のような強力な効果を発揮し、なおかつ経口投与可能な制癌剤が少い現状において、上記のように経口投与によってもすぐれた制癌効果を示すものであり、きわめて有用かつ画期的な制癌剤として、人癌の治療にも用いられ得る。

本剤は静脈内注射、皮下注射、経口等の方法で投与され、成人の治療に用いられる場合の投与量は、投与経路および投与回数により異なるが通常 / 日 0.5~1.0g の範囲が望ましい。

本発明の 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトは遊離の形でも水溶性にすぐれており、したがって剤型変換の可能性が大きく、任意慣用の方法で投与用に調製することができる。

見られなかった。

なお、対照として 6-メルカプトプリン（60 mg/kg、腹腔内注射）投与マウスでは、投与後 1 週間を経過しても無処理マウスの 50% 以下の骨髄細胞しか認められず、薬剤の影響から完全に復帰する為には投与後約 4 週間の休養期間が必要であった。

以上の実験例から明らかなように本発明の 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトは、例えばエールリッヒ癌のような異系腫瘍のみならず、マウス白血病 P 388、ルイス肺癌、マウス結腸癌コロノ 26 などの従来難治性とされている同系腫瘍に対しても、経口投与あるいは頻回持続投与といった投与方法の工夫により、強力な制癌作用を示し、また急性毒性試験等から解るよう非常に安全性が高く、さらには汎用の制癌剤の多くが有する骨髄抑制作用がきわめて軽微であり、長期使用に際しても副作用の出現の恐れが少い、きわめて優れた制癌剤である。本剤は

(8)

従って、この発明は人体用医薬として好適な、少なくとも本発明化合物またはその製薬上許容し得る塩を含有する製剤組成物を包含するものである。このような組成物は任意所要の製薬用担体あるいは賦形剤により、慣用の方法で使用に供される。

この組成物は胃腸管からの吸収に好適な形態で提供されるのが望ましい。経口投与用の錠剤およびカプセルは一定量投与形態であり、結合剤例えばシロップ、アラビアゴム、ゼラチン、ソルビット、トラガカントまたはポリビニルピロリドン、賦形剤例えば乳糖、砂糖、とうもろこし澱粉、りん酸カルシウム、ソルビットまたはグリシン、潤滑剤例えばステアリン酸マグネシウム、タルク、ポリエチレングリコールまたはシリカ、崩壊剤例えば馬鈴薯澱粉あるいは許容し得る湿潤剤例えばラウリル硫酸ナトリウムのような賦形剤を含有していてもよい。錠剤は当業界で周知の方法でコーティングしてもよく、必要に応じて着色剤、矯味剤などを加えること

ができる。経口用液体製剤は水性または油性懸濁液、溶液、シロップ、エリキシル剤その他であってもよく、あるいは使用する前に水または他のビヒクルで再溶解させる乾燥生成物であってもよい。

このような液体製剤は普通に用いられる添加剤例えば懸濁化剤例えばソルビットシロップ、メチルセルロース、グルコース／糖シロップ、ゼラチン、ヒドロキシエチルセルロース、カルボキシメチルセルロース、ステアリン酸アルミニウムゲルまたは水素化食用脂、乳化剤例えばレシチン、モノオレイン酸ソルビタンまたはアラビアゴム、非水性ビヒクル例えばアーモンド油、分別ココナツ油、油性エステル、プロピレングリコールまたはエチルアルコール、防腐剤例えばp-ハイドロキシ安息香酸メチル、p-ハイドロキシ安息香酸プロピルまたはソルビン酸、場合によっては色素、香料を含有してもよい。

注射用組成物は一定投与量アンプルあるいは

(/ /)

製剤例 1 注射剤

滅菌 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイト 250 mg を含有するようにバイアルに無菌的に分配し、密封して水分およびバクテリアを除去した。使用前にリドカイン 0.5 % 注射液 2 ml を添加して注射剤とする。

製剤例 2 注射剤

滅菌 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイト 塩酸塩 250 mg を含有するようにバイアルに無菌的に分配し、密封して水分およびバクテリアを除去した。使用前にリドカイン 0.5 % 注射液 2 ml を添加して注射剤とする。

製剤例 3

- | | |
|---|--------|
| 1. 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイト | 250 mg |
| 2. マンニット | 200 mg |
| 3. 馬鈴薯でんぷん | 47 mg |
| 4. ステアリン酸マグネシウム | 3 mg |

添加防腐剤、適当な溶解補助剤と共に多投与量容器中に提供される。組成物は懸濁液、溶液、油性または水性ビヒクル中の乳液のような形態であってもよく、懸濁化剤、安定化剤および（または）分散剤のような処方剤を含んでいてもよい。一方、活性成分は使用する前に適当なビヒクル例えば発熱物質不含の滅菌した水で再溶解させる粉末であってもよい。

これら組成物およびその可溶性塩は投与方法により 0.1 % 以上、好ましくは 10 ~ 60 % の活性物質を含有することができる。組成物が一定投与量からなる場合には、50 ~ 2000 mg の活性成分を含有するのが好ましい。

本発明の 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトを静脈内投与する場合には、遊離形のままであるいは該化合物を塩の形、例えば塩酸塩とするのが好ましい。

この発明の製剤例をいくつかあげる。

(/ 2)

1 および 2 を混合し、3 を 10 % でんぷん糊として加えて粒状化した。この粒子を No. 60 メッシュ (B.B.) のふるいを通し、乾燥して一定の重量とし、No. 60 メッシュ (B.B.) のふるいでふるった。次にこの粒子を 4 と混合してなめらかにし、7/16" パンチで圧縮して各錠 500 mg の錠剤とした。

製剤例 4 坐 剤

- | | |
|---|---------|
| 1. 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイト | 500 mg |
| 2. タンニン酸 | 30 mg |
| 3. ロートエキス | 20 mg |
| 4. イクタモール | 200 mg |
| 5. アミノ安息香酸エチル | 100 mg |
| 6. カカオ脂 | 1500 mg |

1 ~ 5 と 1/3 量の 6 を研和して坐剤塊とし、次に 2/3 量の 6 を熔融したもの (30 ~ 35 °C) を加え、かきまぜながら放冷固化する直前、粘稠となった時速やかに坐剤型に注入して冷却した。型からとり出した坐剤に直ちに

タルク末を散布し、うすい硫酸紙またはパラ

フィン紙あるいはスズ箔で包装した。これら

の他本剤は任意慣用の方法により軟膏、舌下

錠などの形にも製剤し得る。

(/ 5 完)